

# 日独相互作用に見られる

## パーセプション・ギャップの問題

—異文化行動能力養成と「外国語としてのドイツ語」教育—

杉谷 眞佐子

国際化が急速に進展する現在、さまざまな社会領域において日本とドイツの間で直接的・継続的な交流の機会が増えている。学生の海外旅行、語学研修、ホームステイなどの機会は、数年前に比べても飛躍的に伸びている。直接的な交流の機会は個人的な領域に限らない。留学、研究滞在や大学でのドイツ人講師の授業、或いは同僚としての交流等に加え、例えば、1984年以降実施されているドイツ学術交流会の "Sprache und Praxis" のような制度を利用し、日本企業へ研修にくるドイツ人も年間15~20人いる。彼らの大部分は日本学の専攻生ではなく、自然科学・社会科学の領域で修士、博士課程を修了し、さらに平行して日本語の勉強も行なっている人々である。来日後、続けて約一年語学研修を行なった上で、研修生として各企業へ赴く。このような新しいタイプの「留学」に加え、周知のように、アジアや世界経済における日本の地位の変化、ドイツ統一、EC統合などにより、日独の企業間取引や相互進出の事例も増えてきている。

ところで「外国語としてのドイツ語」の社会的な使用領域や形態が変化するにつれ、「ことばの問題」とならび、価値観や「コミュニケーションスタイルの相違」による意志疎通の困難性が指摘されてきている。いわゆる「異文化誤解」の諸事例は、そのままエピソードで終わらず、引いては、対等の人間関係を長期的に築くことを困難にし、社会的にもマイナスに作用する、というケースも稀ではないようだ。というのも、上述のようなさいきんの日独間の交流の変化に

より、短期の旅行のような一時的な出合いや、大学や研究所等で「教えを乞う」といった接触とは異なった質の出合いが生じているにも拘らず、新しい事態への対応が言語的にも、心理的にも不十分な場合があるからである。それに対し、過去に多く観察された種類の出合いは、両社会の少数の「エリート層」を中心に、特定の社会行動領域内で、しかも多くの場合明確な上下関係のもとで、限定的に生じていた、と特徴づけられようか。

現在、上に述べたような日常生活次元で、異文化圏出身者と継続的に接触する機会が増大するにつれ、過去の限定的な「研究者交流の時代」にはいわば「エピソード」として片付けられていた異文化コミュニケーションの問題が、量的・質的に重要な社会的問題として認識されてきている。またこの種の問題が、時に政治問題に発展することさえ、我々は知っている。

しかしこのような現象が極めて複雑な要因を抱えていることを併せて知っているせいか、我々は、「文化摩擦」という実に漠然としたことばを充てて済ませ、研究対象として扱うことに、どちらかというためらいを感じている。だが、問題の複雑性は、時にその問題の社会的重要性を反映することもある。またこれらの諸問題は、外国語教育との関連で見ると、コミュニケーション能力の養成を学習目標とするとき、さらに重要な意味あいを帯びてくる。その一つは、文法・語彙・発音という狭義の言語知識を、社会的文脈を無視し、即ち、或る文化圏に特徴的な(標準的)行動指標(Kulturstandard)、価値観、社会的行動慣習等を系統的に取り入れること無く媒介するのみでは、言語知識を、いわば「実験室的」に運用するのみ、という言語態度を、外国語授業を通じて育てかねない、という認識である。この問題は伝統的な「文法・訳読方式」による専門書講読を目標とする授業では、背景の概念知識が研究者間で共有される割合が高いため、あまり問題として意識されなかったようだ。しかし、さまざまな社会層の人々が日常的に接触する機会が増大するにつれ、「発話意図」とその(言語形態の対応のみではなく)社会的に適切な言語行動パターンとの対応や文化的ずれを認識する能力の育成を外国語教育のなかで適切に位置付けることが、重要

な課題として認識されるようになってきたのである。

通常の伝達行為では、言語表現(Sprachäußerung)はそれ自身で独立して、社会的相互作用の流れのなかで、言語「行動」のなかに埋め込まれている。従って言表次元の整合性(Kohäsion)のみでは、適切な意図の実現には不充分であることが多い。換言すれば、文法的に正確な文が、社会的な文脈のなかで発話者の意図を達成するのに適切な伝達行動を必ずしも保証しない、という「あたりまえの事実」の認知である。

この問題を観点を変え、学習目標と言語機能との関連で見ると、専門書講読の場合、概念知識の共有を前提に、言語の対象指示的機能(referentielle Funktion)が主な学習対象であったのに対し、コミュニケーション能力養成では、相互作用的機能(interaktive Funktion)が、重要性を増してきている、と言えるだろう。これらの問題は、教授法理論の流れでは、語用論(Linguistische Pragmatik)との関連で議論され、「機能・概念シラバス」に基づく教材も開発されてきた。しかし語用論が論理学の方向へ展開したのに対し、コミュニケーション能力の養成を課題とする教授法理論では、「社会的適切性」の問題がクローズアップされるに至り、言語形態から、言語行動へと学習内容を構成する枠組みが展開していく契機となった。

問題点を明らかにするため、具体例を若干紹介したい。例えば、日本語の「すみません」という謝罪表現は、ドイツ語の /sich entschuldigen/ が発話される場面と重なる面もあるが、異なる場合も少なくない。またよく指摘されることだが、前者は「良好な人間関係の修復」のために発話され、場合によっては責任問題を明確にする「前段階」で使われることが多いのに対し、後者は通常「自己の犯した誤謬を確認し、責任を引き受ける」ために使用される。従って実際に利害が衝突する状況では、„Entschuldigen Sie.“等の発話は、具体的に法的な帰結をもたらすこともある。

謝罪表現を「誠実な態度」という行動パターンと関連づけてみると、文化的相違はより明瞭になるだろう。例えばドイツでは、或る課題遂行後上司から注意

を受けた場合、自己の行動理由を特に求められなくても、自分から説明することが、一般に誠実な態度として評価される。しかし、日本では逆に「すみません」の一言が期待され、それを越える説明は自己弁護や不誠実な態度として、むしろ否定的に評価されることさえある。

さらに、ある場面でそもそも自発的に発言すべきか否かも、日独文化圏で異なる。「特に指名して質問されない限り、授業中発言すべきではない」という行動慣習を文化的に学習した日本人の学生を前に、自発的な質問や討論という学校教育のなかで学習、且つ、教授してきた多くのドイツ人講師は、初め、かなり深刻なカルチャーショックを体験する。

批判的な意見表明はさらに微妙である。或るドイツの研修生は会議の席で意見を求められ、所属企業のために良いと思われる自己の考えを率直に述べたところ、「まだ来て間もないのに、そんな批判的なことを言うとは」と注意されている。彼は自文化の行動パターンに従い、議論を通じた自己主張で企業活動への意欲を示したかったわけだが、むしろ裏目でたようである。日本人上司の発言の背後には、批判的意見表明の前提として、共同の「場」への所属期間の長さが重要である、という価値観が窺えよう。逆に、ドイツ人上司や同僚の下では議論や、積極的な、場合によっては批判的な意見表明が求められることになり、日本人社員は、心理的にかなりの負担を感じる人が多いという。在日ドイツ企業では、日本人社員の自己の行動理由の説明の少なさ、人事考課のさいの「企業意識」(Corporate consciousness)のあり方などをめぐり、日本人側と評価が異なることなどが、問題点として指摘されている。

以上の諸事例が示すように、社会的に適切な言語行動能力の養成をめざす外国語教育では、言語知識やその文法的に正確な運用のみを追究するのでは不十分で、言語を越えた(言語)行動慣習や規範をも視野に入れた学習が必要とされる。即ち「社会的適切性」という「もうひとつの判断基準」が、構造的に取り入れられなければならないのである。要約すれば、外国語教育の場でもコミュニケーション能力の養成を学習目標とする場合、各文化圏で形成されてきた価値観

や行動慣習という、「潜在的な文化」の問題が無視できなくなったと言えるのである。

ところで「潜在的な文化」に属する行動パターンについての知識の重要性は、既に社会心理学の領域で指摘され、研究が進められている。その代表的なアプローチの一つが、帰因理論(attribution theory)に基づくものである。

私たちは通常、他人を含めまわりの世界(環境)を知覚・解釈し、それに基づき、環境を制御したり自己の目的を達成するための行動を起こす。その際、一時的な事象の背後に、共通の「原理」「規則」を抽象化・類推し、そのような「現実世界のモデル」に従い、環境の情報を処理する。この抽象化態勢は同時に、他者の行動に対し「何故そのような行動がとられたか」という「理由」の「解釈」の枠組み(スキーマ)の形成や運用の問題をも含んでいる。我々は環境の諸事象を一回限りのものとして認識するのではなく、スキーマを活用しある程度予測を働かせ、より効率的に対応することが出来るのである。このような推論のシステムやその評価の方法は、ある文化圏での社会化の過程で、暗黙のうちに学習されていることが多く、手続き的な知識として使っていても、宣言的な知識として意識化・言語化されにくい。しかし、異文化間での伝達力の養成を視野に入れた外国語教育などでは、無視できない学習対象となる。

そのため、外国語教育では、言語理論ではなくむしろコミュニケーション理論に基づいた異文化間コミュニケーション研究から、帰因理論に基づいたカルチャー・アシミレーター(culture assimilator)、或いはカルチャー・センシタイザー(culture sensitizer)の構想が、取り入れられてきている。これは一種の文化訓練法(culture training)で、或る文化圏での対人関係を支配する価値観、行動規範、役割期待等についての文化的相違への感受性を高め、また相違を適切に認識し、異文化の立場からものを見る視点の育成を目標とする(attributionstraining 同型帰因訓練)。このような文化学習を取り入れた外国語学習では、同時に、目標文化圏の行動規範への盲目的追従や、感情的反発に基づく自文化優位主義的な態度を相対化する能力を高め、異文化間のコミュ

ニケーショントラブルに遭遇しても、より冷静に対応し、必要に応じてメタ・コミュニケーション次元で問題を提起出来ることをも目標としている。さらに、母語文化圏での社会化の過程で、潜在的に学習してきた価値観や行動規範を自覚し、相対化する視点や能力を育成することも、重要な目標である。従って単に認知的次元のみではなく、行動次元での学習をも対象とする。行動力養成を目標とする場合、認知次元と行動次元の学習を一応区別して考えることは、学習理論の観点からみても重要であろう。

ところで、カルチャー・アシミレーターは既に幾つかの文化圏で開発・使用されており、ドイツ・アメリカ、アメリカと中近東のイスラム文化圏等、或いは日本でもアメリカ、東南アジア、中近東のイスラム文化圏などを対象として開発されている。また外国語／第二言語としての英語教育では、既に、このような学際的な構想に基づいた教材も開発されている。しかし、現在の教員養成システムからくる制限などもあり、日独間の外国語学習や異文化学習については、まだこのような視点は新しく、せいぜいランデスクンデの一部として扱われる程度で、教材開発も殆んど進んでいないのが実情である。従って日独コミュニケーションにおける文化擦摩の事例研究は、将来的に、そのような教材をドイツ人専門家と共同で作成するための基盤にもなるであろう。そのためには、先ず、以下のような経験的な調査・研究が不可欠である：

1. 社会文化的に形成されてきた行動慣習の相違が、日本とドイツという2文化間のインターパーソナルなコミュニケーション場面でどのようなコンフリクトを具体的に引き起こしているか、
2. 具体的な事例の背後に上述のような価値観や行動規範およびその行動指標 (Orientierungsmerkmal) が、間主観的に同定可能か、
3. 言語行動を中心とする機能的な言語学習のための教材開発等に、その知見をどのように活かしうるか。

このなかで1. 2. に関しては、具体的な調査が必要となる。本研究では1992年4月から1993年3月まで、主に、日独のインターパーソナルな次元でのコミ

コミュニケーションで、奇異に思われたり違和感が感じられた具体的な事例の調査・収集を行なった。その数例は上に紹介されている。

インタビュー調査は現在もまだ進行中であるが、93年度の調査をもとに、日本側・ドイツ側からみた典型的な事例をもとに、コンフリクトを生じやすい規範概念や行動慣習の同定を試み、カルチャー・アシミレーター等の開発に着手する予定である。なお、本研究はドイツ・中国間のコミュニケーション問題を研究している Regensburg 大学心理学研究所 Prof. Dr. A. Thomas との緊密な連絡の下に行なわれている。この種の調査・研究は、日米間に比べると、日独間ではまだ非常に少なく、従って個人で行なわれる本調査も、多分に予備調査的な性格を持たざるを得ない。従ってなるべく多くの事例を集めるため、インフォルマントの選択にあたっては、滞在期間、滞在目的、職業等による限定は行なわなかった。その結果、收拾された資料は、社会的な生活領域や滞在年数により、かなり広がりを持つ内容となっている。これは、今後の研究過程で適切に処理されるべき課題としたい。

冒頭で述べたように「国際化」が進展するなかで、「外国語としてのドイツ語」教育はまだ十分に学習目標の多様化に対応しきれていない。しかしその背後には、言語理論からコミュニケーション理論へとパラダイムの転換が進むための、基礎的な次元での調査・研究があまりにも少ないことが挙げられよう。本研究は先行研究が皆無に近いので、既述のように予備調査的な性質をもつが、学習理論と異文化コミュニケーション理論という学際的な「外国語としてのドイツ語」教育学論の今後の方向を探る意味でも、役に立てば幸いである。